コーヒーブレーク

ちょっとしたエッセイ

音声研究から音聲研究へ

入野俊夫（和歌山大/統計数理研）

何年か前，柄にもなく辞書を今までにないほど詳しく見た時期があった。そのとき，見たことがあったはずなのに，「声」の旧字体が「聲」であることを改めて認識した。「声を耳に投げる」とでも読める。声は相手や自分が聞くことを前提として成り立っていることが，漢字が開発された時点で既に理解されていたのであろうか。

戦後当用漢字が制定されて以来，新字体で教育されてきた人間として，これは大きな見落としにつながったかもしれないと，ふと思った。例えば，1960 年代までの音声研究と聴覚研究の緊密さに比べて現状の乖離の著しさは，これと関連あるのであろうか。もしかすると「千葉・梶山」から戦後 20 年間は「音聲研究」，その後は「音声研究」となっていないだろうか。

丁度その転換点頃に登場した PARCOR/LPC をはじめとする音声符号化は，最も重要な音韻情報だけを伝送し，それ以外の情報を切り捨てることに役割があった。これはご存知のとおり大成功を納め，多くの人が携帯電話の恩恵にあずかっている。これとのアナロジーで考えると，「聲」を「声」と符号化（簡略化）したのは，他の部位が別の意味を表す以上，至極妥当で合理的な判断であったろう。これにより漢字を手書きする上で便利になったことは間違いない。

しかし，現在に至っては，漢字を忘れたり書くのが面倒でも，簡単に「音聲」と漢字変換できる。また，信号処理の面でも，多くの場面で符号化を必要としないほど，CPU パワーもメモリも十分使えるようになってきた。これに対し，符号化や劣化により一度失った情報を補うための満足ゆく手段をまだ持っておらず，まさしく研究の対象となっている。

これを含む研究の今後のアプローチとして，「聲」の含意する所を汲み取るためにも，「音声研究」ならぬ「音聲研究」として取り組むというのはどうであろうか。昔の文献を見ていると，思っているよりもずっと多くの知見が既に提案されていて，恥ずかしい思いを何度もする。また，現在聴覚研究も進んでいる。これらを解釈し，現代の技術で更に磨くことは，決して難しくないはずである。温故知新だけではない新たな進展も望めるかもしれない。

日本音響学会誌
Vol. 62 No. 11
p. 834, 2006